

# 水生生物が語る地域環境

## —愛知学泉大学コミュニティ政策研究所・第9回 シンポジウム開催の目的と成果—

矢 部 隆

2002年11月30日に、シンポジウム「水生生物が語る地域環境」を行ない、本紀要でシンポジアストたちに講演内容について報告していただくこととした。

そもそも、今なぜ水生生物たちが語る地域環境について耳を傾けなければならないのだろうか。

ほんの50年くらい前まで身近な水環境は日本人にとって生活の一部であり、フナやドジョウなどの魚類、シジミなどの貝類、カニなどは貴重なタンパク源であったし、ハスやヒシなども食料として利用されていた。ヨシなどは生活用具の素材として活用されていた。集落の中の水路は洗濯をし、米を磨ぎ、野菜を洗う場であり、子供たちは池や川で泳ぎ、水辺の生き物たちと遊んでいた。水中のプランクトンやベントス（底生動物）は、水質浄化に重要な役割を果たしていた。

また日本では、2000年ほど前から水田生態系が本格的に形成され始めた。水田は言うまでもなく人工的な環境であるが、昆虫や小魚、あるいはタニシなどの底生動物が豊富で、それを求めてカエル類やヘビ、カメといった爬虫類、サギなどの鳥類が集まり、多次の食物連鎖あるいは食物網が形成されている。現在の平野部の河川や水路はほとんどが江戸時代に新田開発がさかんだっところに造られるか、流路が決定されるかしたものである。水田生態系の形成は、日本人の生活だけではなく、日本人の心の原風景の形成や文化にも大きな影響を与えてきた。

ところが高度経済成長以降、社会構造や価値観が変わり、池や川は埋め立てられたりコンクリートで固められ、水は汚され、池や川はごみ捨て場と化した。人々は水環境とそこに住む生き物を顧みなくなってしまったのである。

長い目で見れば、水環境を悪化させることは、われわれ人類の財産を失っていることを意味しているものであり、人間の健全な生活はむしろ、精神の荒廃まで引き起こされていくのは間違いない。現在では、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性の保全を目指す生物多様性条約の批准、田中康夫長野県知事による脱ダム宣言など、社会は具体的な方策や目標を持って自然保護、環境保全に取り組む傾向となっている。

今回のシンポジウムでは4名の自然環境に関する専門家が集まった。絶滅危惧生物について述べていただいた森誠一氏は淡水魚類の専門家で、魚類の保全でも高名である。2003年4月30日に、水環境にかかわる生態学的研究で優れた業績を挙げ、活躍が期待される若手研究者に送られる生態学琵琶湖賞（第12回）を受賞した。環境指標生物について話していただいた内田臣一氏は水生昆

虫が専門分野で、東京都立大学大学院理学研究科生物学専攻での私の先輩であり、彼は動物分類学、私は動物生態学という基礎生物学の分野で学んできた。いま内田氏が工業大学の土木工学科の河川・環境研究室、また私が社会科学系のコミュニティ政策学部という、専門とは異なった場で学問的経験を活かしているのも、時代の要請ということを感じさせる。ビオトープについて語っていただいた長谷川明子氏は東海地方で唯一の女性の1級ビオトープ計画管理士であり、「ビオトープを考える会」の会長を務められており、正しいビオトープの知識の普及に尽力されている。

本紀要では各自が専門のカラーを活かしつつ、地域環境における絶滅危惧生物、環境指標生物、ビオトープ、外来生物についてシンポジウムで話した内容を中心にして報告している。地域での環境問題を解決するマニュアルというわけではないが、4名の報告が、地域住民の方々が自然について考えるきっかけとなれば、あるいは環境問題を解決するための何がしかの指針となれば幸いである。

なお、シンポジウムは次のように開催された。

愛知学泉大学コミュニティ政策研究所・第9回シンポジウム  
「水生生物が語る地域環境」

日 時 2002年11月30日(土)

14:00～17:00

会 場 愛知県産業貿易館 西館 第2会議室

主 催 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所

後 援 ビオトープを考える会、日本カメ自然誌研究会

出席者 100名

プログラム

第1部. 報告

1. 「エイリアンタートルズー外来ガメが変える水環境」

矢部 隆 (愛知学泉大学)

2. 「地域コミュニティが守る絶滅危惧魚たち」

森 誠一 (岐阜経済大学)

3. 「正しいビオトープ活動、まちがったビオトープ活動」

長谷川明子 (名古屋大学)

4. 「水生昆虫から学ぶ水環境」

内田 臣一 (愛知工業大学)

第2部. 討論

「これからの時代の水環境との関わり」

コーディネーター 井上 匡子 (愛知学泉大学)